

～ピンクリボン通信 No.1～

「分子標的治療薬」

乳腺外科部長 中野 聡子

皆様こんにちは。今回は、初めてのピンクリボン通信となります。その時々の特ピックスや、皆様が知りたいことについて、テーマを決めて、お伝えできるようにしていきたいと思えます。今回は分子標的治療薬のお話をしたいと思えます。

ここ数年で複数の分子標的治療薬が認可されました。

分子標的治療薬とは、がん特有の異常を狙い撃ちする治療として開発されました。がんだけを叩けるのが理想的ですが、思い通りには行かず副作用もあります。それぞれのお薬によって副作用が異なりますので、患者さんの状態と合わせて治療を選択する必要があります。

- ① ハーツタイプ*に対する抗ハーツ療法としてはハーセプチン、パージェタ、カドサイラ、タイケルブという4剤が使用できることになりました。以前は、悪性度が高いとも言われていましたが、分子標的治療薬が最も早くから使えるようになったタイプで、最近では使えるお薬の種類も増えて治療効果も期待できるようになりました。ハーセプチン、パージェタは術前治療でも使用できるようになりました。
- ② ホルモン受容体陽性かつハーツ陰性のルミナルタイプに対しては、手術不能又は再発が認められる状態では、イブランス、ベージニオ、アフィニトールという分子標的治療薬が使用できるようになりました。これらのお薬はホルモン剤と併用で使えます。ホルモン剤が効きづらくなった患者さんの新たな治療戦略として期待が持てると思えます。
- ③ 乳がんになる方の5%～10%が遺伝的要因があると言われてはいますが、多くはBRCA1あるいは2という遺伝子の変異が原因とされています。これらの遺伝子変異は、ルミナルタイプ、トリプルネガティブタイプと関係がある場合がありますが、ハーツタイプとは関連はありません。手術不能または再発、ハーツ陰性で、化学療法治療歴がある場合には、ご希望があれば、保険で遺伝子変異の有無を調べることができるようになりました（3割負担で約6万円です）。遺伝子変異が確認されれば、リムパーザという分子標的治療薬が使えることになりました。
- ④ がんが増殖をする際に血管を通じて栄養を運びますが、この血管の形成を抑える血管新生阻害薬という種類のアバスチンというお薬があります。手術不能又は再発乳がんの方のみが対象となりますが、パクリタキセルという抗がん剤と一緒に使うことでその効果を高めることを目的としています。

*：がんの性格（サブタイプ）には、ルミナルタイプ、ハーツタイプ、トリプルネガティブタイプなどの種類があります。それぞれに性格が異なり、使用するお薬が異なります。

次回は、乳がんと診断された場合の当院のクリニカルパスのご紹介です。